様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 ２７ 日現在

機関番号：３２３０９
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2016
課題番号：２５８６２１６４

研究課題名（和文）治療期にある若年性乳がん患者の社会復帰支援モデルの開発

研究課題名（英文）Development of the Support Model to social reintegration of Young Women with Breast Cancer in the Treatment Phase

研究代表者
萩原　英子（Hagiwara, Eiko）

群馬パース大学・保健科学部・准教授

研究者番号：４０４３８７７６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、治療期にある若年性乳がん患者の社会復帰を目指す体験をもとに、治療期にある若年性乳がん患者の社会復帰支援モデルを構築することを試みた。
　まず、若年性乳がん患者に関する研究を概観し、若年性乳がん患者に関する課題及び支援の方向性について明確にした。次に、若年性乳がん患者に対する面接調査を通して、若年性乳がん患者が社会復帰に向かう中でいかなる体験をしているのかを明らかにし、看護支援の示唆を得た。これらの分析結果を基に、社会復帰支援モデル案を構築した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to development of the support model to social reintegration of young women with breast cancer in the treatment phase according to their lived experiences.
In the first stage, we performed an analysis the issue and supporting direction of young women with breast cancer, overviewing the researches on young women with breast cancer. In the second stage, we got a suggestion of nursing support methods by clarifying what experiences in social reintegration of young women with breast cancer through an interview survey on them. Based on the analysis, we constructed a support model to social reintegration of them.

研究分野：成人看護学　がん看護学

キーワード：若年性乳がん　社会復帰　支援モデル　外来看護

１．研究開始当初の背景

我が国において、最も多くの女性が罹患するがんは乳がんである。乳がん罹患のピークは 40 歳代後半であるが、20～30 歳代で乳がんと診断される患者も漸増傾向をみせている。

乳がんは他のがんに比較し、初発治療後 10 年間にわたって経過を観察する必要があり、治療期間が長期にわたる。さらに治療後の生存率が高いことにより、乳がんと診断された患者は乳がんサバイバーとして、長い人生を乳がんと共に歩むことになる。

特に、若年性乳がんと呼ばれる 35 歳以下の乳がん患者は、仕事や学業といった社会生活や家事などの家庭生活の中での役割だけでなく、結婚、妊娠・出産、育児などの人生にとって重要なライフイベントを控えている。この時期にがんであると診断され治療を受ける患者は、女性としての将来を考え、がんであることを隠そうとして孤立したり、手術による身体の創や治療による副作用症状などによる大きな衝撃と苦悩を経験する。がん患者は、治療前と同じ生活を保持することで、自分らしい生活を演出しつつ生きていくことにより、生きる目標を存在させることができる(犬飼,2002)。よって、がん患者が治療を継続する中でも、がんに罹患する以前の自立した社会生活や家庭生活を取り戻すことは、がん患者が目標を持って、その人らしく生きていく上で重要な要素であると言える。若年性乳がん患者が社会生活や家庭生活への帰属意識を回復し、社会の構成員として自立することを支援することは、患者の尊厳を維持・回復することにも繋がるものと考えられ、患者が治療を継続する中で、これからの長い人生を社会生活や家庭生活を送る自立した一人の女性としてがんと共にどう生きるのか、どのように自身の持つ役割を果たしていくのか、明確な将来の方向性が見いだせるよう、継続的な看護支援を行うことが求められている。

しかし、看護学領域におけるがん患者の社会復帰に関する研究は少なく、がん患者の生活の場面である社会生活や家庭生活への復帰に焦点を当てた研究は殆どない。若年性乳がん患者に関する研究においても、国内では、診断・治療選択時の支援に関する検討(阿部,2011;村田, 2010)や情報ニーズに関する検討(四方, 2012)がなされているに過ぎない。国外の研究においても、その多くが妊孕性(Gorman JR,2011)やセクシャリティ(Bakewell RT,2005)に焦点を当てたものであり、若年性乳がん患者が社会生活や家庭生活への復帰を目指す過程における支援方法を検討した研究は少なく、未だ、具体的な看護支援方法の確立には至っていない現状がある。

また、乳がん医療は入院治療から外来治療へと大きくシフトしており、多くの乳がん患者は外来で治療を継続しながら、社会生活や家庭生活への復帰を目指すことになる。このような患者は、がん罹患に伴う心理的な問題や手術や治療に伴う機能障害や副作用の対処に関する問題のほか、地域社会における人間関係や復職に関する問題など、対応が難しい問題にひとりで対峙しなければならない。これから様々な役割を拡大し、その責務を担っていく若年性乳がん患者が長い治療を継続する中で円滑に社会復帰を果たすまでの過程では、患者自身が主体的に問題解決に取り組む力を獲得し、発揮することが必要である。

そこで本研究では、若年性乳がん患者が治療を継続しながら、円滑に社会復帰が果たせるよう支援するための社会復帰支援モデルを考案することを目的とした。

２．研究の目的

本研究は、①若年性乳がん患者の看護に関する国内外の研究論文より、これらの問題点と支援の方向性を明らかにする、② 若年性乳がん患者が治療を継続しながら社会復帰に向かう中でいかなる体験をしているのかを明確にする、③これらの研究結果を統合し、支援モデルの目的、構成要素、介入時期等を検討し、現実に即した若年性乳がん患者の社会復帰支援モデルを構築することを目的とした。

３．研究の方法

1) 若年性乳がん患者の看護に関する国内外の研究論文の文献検討

(1)目的：若年性乳がん患者の看護に関する国内外の研究論文を文献検討することにより、その問題点と支援の方向性を明らかにすることを目的とした。

(2)対象文献：「乳がん(breast cancer)」、「若年女性(young women)」、「看護(nursing)」または「ケア(care)」をキーワードに含む原著論文を対象とした。

(3)データ収集方法：Cumulative Index to Nursing & Allied Health Literature (CINAHL)及び MEDLINE、医学中央雑誌を使用し、検索を行った。検索対象期間は、検索出来る全年とし、言語は英語及び日本語のみとした。

(4)分析方法：対象文献を熟読し、若年性乳がん患者の看護について記述している箇所を抽出し、質的に分析を行った。

2) 治療を継続しながら社会復帰を目指す若年性乳がん患者の体験

(1)目的：若年性乳がん患者が治療を継続しながら社会復帰を目指す過程における体験を記述し、この過程における看護支援方法

を検討することを目的とした。また、この結果をもとに、支援モデルの構成要素を抽出した。

(2)対象：乳がん診断時、40 歳未満の乳がん患者のうち、術後外来にて、術後補助療法(化学療法)を継続しながら社会復帰を果たしている患者、約 10 名を対象とした。

(3)調査方法：「乳がんの治療に対する思い」「社会復帰に向けた思い」等の質問からなるインタビューガイドを作成し、対象者 1 名につき 3 回の面接調査を実施した。

(4)分析方法：研究対象者の「生きられた体験」の本質を捉えるために、Heidegger の現象学的存在論を理論的前提とし、Colaizzi の分析方法に基づく現象学的アプローチを用いて分析を行った。分析の結果より、支援モデルの構成要素を抽出した。

3) 支援モデルの考案

文献検討及び調査の結果を統合し、患者の目指す目標及び構成要素と内容、介入時期等を検討し、支援モデル案を作成した。

４．研究成果

1) 若年性乳がん患者の看護に関する国内外の研究論文の文献検討

(1)対象文献の概要

国外の文献は 14 件が分析対象となったが、国内の文献では分析対象となる文献は存在しなかった。

(2)結果

①若年性乳がん患者の看護に関する研究の動向

国別にみた著者の所属機関の別では、アメリカ合衆国が 6 件と約 4 割を占めていた。また、研究デザイン別に分類すると、11 件が因子探索研究、3 件が関係探索研究であった。研究対象者を概観すると、50 歳未満の乳がん患者を対象にした研究が 5 件と最も多かったが、研究対象となった患者の平均年齢は、34-42 歳間が最も多くみられた。

②研究内容

研究内容について概観した結果、性・生殖に関する研究、がん罹患体験に関する研究、家族における役割に関する研究、リハビリテーションの必要性に関する研究の 4 つの側面から研究がなされていることが明らかとなった。

(3)考察

若年性乳がん患者は他の年代に比較し、多様な問題を抱えており、多くの支援が求められているにもかかわらず、若年性乳がん患者に関する研究は少なく、着手され始めたばかりの萌芽期にあるという事が示された。若年性乳がん患者の看護に関する理論や知識の構築とそれらに基づいた看護介入方法を確立できるよう、基礎的研究の推進が望まれる。

また、若年性乳がん患者に関してこれまでに行われている研究の内容は、性・生殖や、がんの与える影響、家族における役割、リハビリテーションの必要性といった、若年性乳がん患者が抱える問題を一側面から捉えたものが殆どであった。しかし、看護はホリスティックなものであるという観点から若年性乳がん患者の看護支援を捉えると、若年性乳がん患者のがん罹患やがん治療を受ける中で経験した、包括的なありのままの現象を踏まえることが重要であると考える。よって若年性乳がん患者の全体像を捉えるために、今後はさらに、身体的側面、心理的側面、社会的側面など多面的な視点からの研究が必要である。

2) 治療を継続しながら社会復帰を目指す若年性乳がん患者の体験

(1)対象者の背景

対象となった 7 名の若年性乳がん患者の乳がん診断時の平均年齢は 35.6 歳(range:29-38 歳)であり、病期は stage Ⅰ-ⅡB であった。また、7 名全てが乳がん罹患前より何らかの仕事に従事しており、術後も術前からの仕事の継続または新たな仕事に従事し、何らかの社会生活上の役割を担っていた。

(2)結果

若年性乳がん患者は社会復帰を目指す中で、自分の人生のすべてを変えてしまった乳がんと折り合いをつけながら、「元に戻ることができた」と感じる一方で、乳がんになったことにより変えざるを得ない生活があることに気づき、新たな生活の在り方を模索しながら、生活の再構築に懸命に取り組む様子が明らかとなった。

また、若い年齢で乳がんになったことから、これからも続く長い人生を乳がんを背負って生きることについて憂慮しながらも、乳がん患者である自分を忘れることができる場面である職場や忙しさを自分に与えられた特別な場であると捉え、自分に与えられた役割を遂行しようと取り組むことで自分の存在意義を実感していることが示された。

(3)考察

本研究の結果より、若年性乳がん患者にとっての「元に戻る」という意味での社会復帰は自分自身の存在意義の復活を含んでいるものと考えられた。その支援においては、若年性乳がん患者が求める「元に戻る」ということの具体的な内容を患者と医療者が共通認識することが必要である。また、治療と社会復帰を並行して進めるには、治療における副作用症状をマネジメントする方法について具体的に指導するだけではなく、マネジメントできるという自信を患者自身が抱くことができることが必要であることが示唆された。

3) 支援モデルの考案

文献検討及び調査の結果をもとに、支援モデルの目標、構成要素及び介入時期等を検討し、支援モデル案を作成した。

支援モデルの対象は、治療を継続しながら社会復帰を目指す若年性乳がん患者とし、術前より継続的に介入をすることとした。

介入方法としては、対象者の理解を促進するためのツールとしてリーフレット等を作成し、教育的支援等で構成した。

作成した支援モデル案については、プレテストの実施結果を踏まえ今後も内容を精錬し、臨床適用を目指す。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　　1 件）

①Eiko Hagiwara,、Tamae Futawatari、Trends and Issues Related to Studies on Nursing Care for Young Women with Breast Cancer、群馬パース大学紀要、査読有、第 21 号、2016、pp.未定

〔学会発表〕（計　0 件）

〔図書〕（計　0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者

萩原　英子(HAGIWARA,　Eiko）
群馬パース大学・保健科学部・准教授
研究者番号：４０４３８７７６

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし

(4)研究協力者

二渡　玉江（FUTAWATARI, Tamae）